

今にも降り出しそうな空の下を通り抜けて、僕は約束の場所に辿り着いた。雨が降るのを覚悟していたので、折り畳み傘を使わなくて済んだことに安堵する。何だかんだで、折りたたみ傘は使いたくないものだ。片付けが面倒だし。

分厚い木縁の扉を開けると、重い鐘の音が、僕の来店を告げる。ふんわりと、香ばしい匂いが鼻をくすぐる。

外は湿気を含んでいて不快だったが、店内は空調が効いていて、一息つけた。滲んでいた汗を、ハンカチで拭う。

僕は、自宅から歩いて十分の個人経営のカフェに来ていた。去年くらいに出来たばかりのカフェは、店内も綺麗で、何よりコーヒーが美味しい。このカフェは完全禁煙のため、店内はコーヒーの心地よい香りが充満している。この匂いが、僕はとても好きだ。煙草を吸う人には申し訳ないが、やはり匂いを楽しむ飲食物を提供する店では、喫煙は遠慮したい。

「お一人ですか？」

僕の来店に気付いたウェイトレスが尋ねてくる。僕は店内の様子を伺うように、

「いえ、連れが先に来ているはずなんですが」  
と、答える。

それほど広くはない店内の最奥、四人がけのテーブルに彼女は座っていた。いつもの僕たちの指定席に。こちらに背中

を向けてはいたが、見間違える訳がなかった。

「奥に居るみたいです」

店員さんの「お連れ様ご来店です」という発言を背中に聞きながら、奥に向かう。

彼女はいつも通り、文庫本を一心不乱に読んでいた。ものすごい集中力だ、と思う。僕もさすがに、この集中力で本を読めない。感心していると、僕の気配に気付いたのか、彼女はゆつくりと顔を上げた。

「恭夜くん」

「ごめん、待った？」

「ううん、今来たところ」

テンプレートな会話をしているが、彼女が今来たところではないのは、彼女の目の前のアイスコーヒーがほとんどなくなっているところから分かる。ちょうど彼女が来てから二十分といった所か。いや、飲み物も飲まず読書していた可能性もあるから、もっと長いかもしれない。

彼女の対面に座り、自分の分と、それから彼女の追加分のアイスコーヒーを頼む。

「ごめんね、呼び出して」

彼女……奥田希美は言った。

「いつものことだから、大丈夫」

僕が告げると、希美はにっこりと微笑む。

今日、本当は希美と会う予定はなかった。前回のデートはつい一昨日で、次は一週間後の日曜日の予定だった。しかし、今日の午前中に突然、『今日の十五時くらいから暇?』と連絡が来たのだ。当日、突然誘われた自分の予定は、十八時からアルバイトを除けばフリーだったので、希美の呼び出しにほいほいと乗ったわけである。まあ希美は、僕が今日アルバイト以外の予定がないことは承知で、僕を呼び出しているはずだが。

こういうことは、珍しくない。希美はぼつかりと自分が暇な時間ができる、僕を呼び出す。暇な時は行くし、大学のレポートが溜まっていて忙しいときは、断る。断つても、希美は、責めたりはしない。そんな、距離感が僕としては楽だった。

希美とは高校の時に出会い、付き合って三年が経つ。初めての恋人で、最初は距離感が掴みにくかったけど、今では慣れたものだった。このまま、ずっと二人でいられたらいいと思う。未来のことを言っても、鬼に笑われるだけだけど。

お待たせしましたーと、アイスコーヒーが二つ運ばれてくる。喉が渴いていたので、ストローを挿して、口に運ぶ。コーヒーの香りが鼻腔をくすぐり、コクのある苦味が舌を刺激

する。美味しい。いつも通り、この水出しのアイスコーヒーは絶品である。本当ならホットでブレンドコーヒーを頼みたいところだ。だが、ジメジメした湿気交じりの外気の中を歩いてきた直後だったので、とにかく冷たい飲み物を喉に流し込みたい気分だった。希美はミルクと砂糖を入れて、ストローでくるくるかき混ぜている。彼女はブラックでコーヒーを飲めない。店員が、机の端に伝票を置いた。

窓をぼつり、一滴の雫が打った。それに連なるように、水滴が降り注ぐ。どうやら先ほど懸念したとおり、雨が降り出したようだ。折りたたみ傘を持ってきて正解だったが、この雨の中、バイトに行くと思うとうんざりした。

僕はもう一度、コーヒーを飲んで言う。

「今日はどうする?」

あまりに抽象的な問いではあった。だけど、既に交際を始めてから三年、この程度の曖昧さでは、僕たちの間で意思疎通ができなくなるといったことはない。

いつもなら、「買い物に行く」「映画に行く」といった選択肢が候補に挙がる。予定がない日はだいたいそんな感じに落ち着くのが常だった。

「十八時からバイトだから、そんなに時間は取れないけど。

このまま、ここでお茶していてもいいし」

「恭夜くん、別れよう」

その言葉の意味を、最初は本当に理解できなかった。あまりに会話として成立していなかったから。

「ん、分かれて行動するってこと？」

「違うよ、恭夜くん。私は、あなたと別れたいと言っているの。彼女と彼氏であるという関係を、解消したいと言っているの」

希美の表情は、さつきから変わらず、穏やかに微笑んだままだった。冗談なのか、真剣なのか、はつきりしない。

「おい、冗談はよせよ、希美」

僕は怒りを語尾に滲ませた。なぜ、このタイミングでそんな冗談を言うのか、訳が分からなかった。希美はわりと冗談を言う方だけど、こんな文脈で冗談を言うのが理解できない。

「冗談じゃないよ。私はこんな文脈で、冗談を言うキャラじゃないでしょ？」

希美はそう言うのと、残っていたアイスコーヒーを飲み干して、立ち上がった。財布から千円札を一枚抜き取って、伝票のそばに置いた。

「本当にごめんね。突然で混乱するよね。でも、もう無理なの」

「待てよ、おい！」

あまりに唐突過ぎて、情報の整理ができていない。歩み去ろうとする希美の腕を掴もうとするが、するりと、砂のように零れ落ちてしまった。

扉の重い鐘の音が、希美が立ち去ったことを告げた。

気がつくのと、大雨に打たれていた。

いつの間にか、店の外に出ていたらしい。店の中にいたときはポツポツと降り始めていただけの雨は、いまは土砂降りになっていた。視界すら、曇るくらいに。

折りたたみ傘が鞆の中に入っているが、傘を取り出すを忘れるくらい、混乱していたらしい。既に頭の上から、スニーカーの先まで、ずぶぬれだった。鞆も、特に防水加工をしている訳ではないので、中がぐちゃぐちゃになっていることだろう。何か紙の物が入っていただろうか？ 入っていないはず。正確に覚えていなかったし、入っていたとしても、もはやどうでもよかった。

「あ……」

声が漏れ出る。それは、自分の耳で聞いても、失意の音が混じっていた。

思考がぐちゃぐちゃに歪んでいた。どうして、僕が希美に

フラれたのか。そもそも、あれはフラれたのか。別の解釈ができるのではないか。いや、あそこまで、明確に提示されたら、それは別離の言葉以外の何物でもないではないか？ いや、でも、なんでもそも僕がフラれなきゃいけないんだ？ 完全に堂々巡りだった。僕は答えを求めているけれど、答えは僕は知っていないのだから、当たり前だった。

「は、はは……」

唐突に、足の力が抜けた。膝から挫け落ちる。濡れたアルファルトの歩道に、膝を着いた。人生で初めて、文字通りの挫折だ。

それくらい、希美のことを愛していた。高校で出会って、付き合い始めて、いろいろあったけど、間違いなく愛していたと言える。

愛していた人に、想いが届かなくなることが、こんなにも辛いなんて。

このままじゃ駄目だ。少なくとも、理由は訊かないと。納得も理解もできない。

ケータイをポケットから取り出した。雨のせいで、多少濡れてはいるけど、この程度では壊れはしない。電話帳から希美の番号を呼び出す。十一桁の数値列、この先に希美はいる。

電話をかける。

『おかけになった電話は現在、電源が入っていないか——』  
……繋がない。当然だ、あんな一方的に別れを切り出して、僕が絶る余地を残す訳がない。

アスファルトを背にして、寝転がる。あらゆる気力が根こそぎ奪われ、もう膝を着く状態すら困難だった。背中に濡れたアスファルトの感触を、不快だと思ふ感情の揺れすら存在しない。

腫の縁が暖かかった。おそらく、僕は涙を流しているのだろう。だけど、暗い灰色の空から降り注ぐ雨と交じり、曖昧になる。

もう、すべてのことがどうでもよかった。いや、正確には希美のことだけは考えていた。

あれは、たまたま今日だけ機嫌が悪かったのか。明日になったら、ケロっとしているんじゃないか。そんな希望的観測が、首をもたげる。

「はははは」

自嘲する。そんな希望が叶うなら、誰も苦労しない。一時的なものなら、わざわざ別れを告げるためだけに、僕を呼び出さないだろう。

つまり、さつき起きたことは覆りようがない事実なのだ。分かりきったことだった。

仰いだ天空からは、挫折した僕を嘲笑うように、水の粒が降り注いでいた。僕は疲れ果て、重い瞼を閉じた。

——。——。

目が覚めた。

飛び込んだきたのは、自室の天井。カーテン越しに、仄かに太陽の光が部屋の中を明るくしている。

「んあ」

間抜けな声を出してしまった。完全に寝ぼけている。……寝ぼけている？

記憶が曖昧だった。頭には、鈍い痛みがずきずきと横たわっている。

僕は道路上で、横になっていたはずだ。希美に別れを告げられ、それがショックで、挫け折れたはずだ。それがどうして、自分の部屋にいるんだ？ いつの間にか帰ったのか？

混乱していると、枕元の目覚まし時計が大きなベル音を鳴らし始めた。反射的に手を伸ばして、音を止める。時間を確認すると、六時三十分。清しい、朝の時間帯。

そこで、初めて違和感を覚えた。現在は、六時三十分が目覚ましを鳴らす習慣はない。今は大学の一時限目の講義を履

修していないので、起きるのは八時だ。そして何より、ケイタイのアラームを目覚まし代わりにしているので、この目覚まし時計は使っていない。

なんで、目覚まし時計がこの時間に鳴ったんだ？ 僕が知らない間に、セットしたのだろうか。

「きょうやー、起きたの？ ご飯できてるよー」

階下から、母親の声が聞こえた。大学生になってから、こうやって起こすことは少なくなったが……。何もかも、チグハグだ。

とりあえず、一階に降りよう。そう思い、部屋から出ようとしたところで、ふとドアの横に置いてあった立ち見鏡を見た。

そこに映っていた顔を見て、違和感の正体に気付いた。映っていたのは間違いなく、僕の顔だ。ただ、

「若い」

顔にはまだあどけなさが残っている。少なくとも、大学生のそれではない。髪も、今は少し伸ばしていたが、鏡の中には短髪の姿。

僕が、若返っている？

いや、単純に若返ったんじゃない。

僕は転がるように階下に降りて、リビングに入る。

「おはよう、恭夜。……何をそんなに慌てるの？」

母が尋ねてくる。顔立ちはそんなに変わっていないような気がするが、髪型が昨日見たものとは違っていた。

「新聞、ある？」

「珍しいわね、新聞を読みたがるなんて。机の上に置いてあるわよ」

返事もそこそこに、僕は新聞を広げる。目当ては、紙面の上部に書いてある、日付だ。

そこには、三年前の西暦が書かれていた。二〇一〇年九月八日。

息を呑んだ。ついさつきまでは、二〇一三年の、七月十三日だったはずだ。つまり、僕は三年前にタイムスリップしたということなのか……？ 記憶を持ったまま、三年前の自分の体に意識が舞い戻った。そんな、SFみたいなことが起こったということか……？ 一体、なぜ？

慌てて、紙面を繰る。流石に細かいニュースまでは覚えていないが、暴走車が路上に突っこんで多数の死傷者を出した事件の記事が掲載されていた。これは記憶に残っている。確かに、この事件は三年前だった。ついでにスポーツ欄を見る。

ひいきにしている野球チームのメンバーが、今とは異なっていた。四番を打っている選手は、確かこの年に引退したはず

だ。

と、言うことは。ここは、本当に三年前なのか――。

「恭夜、どうしたの」

「い、いや、なんでもない」

「お父さんが起きて来るまでに、ご飯食べちゃいなさい」

「うん……」

促されるまま、ダイニングテーブルに座る。目の前には、トーストと、目玉焼きと、昨夜の夕食の残りものであるうポテトサラダ。

大学生になってから、生活サイクルが不規則になり、朝食を食べることは少なくなっていた。

久しぶりに食べた朝ごはんは、とてもおいしかった。

ご飯を食べ終わったあと、自室に戻った。

今が三年前ということは、僕はちょうど高校二年生のはずだ。その証拠に、高校の時の制服がハンガーにかかっている。

さつきは寝起きだったので、気付かなかった。

「高校、か」

さつき新聞を確認して、今日が平日だということは分かっている。つまり、高校に登校しなければいけないということだ。正直、高校に行っている場合じゃない気がするが、しか

しそれ以外の行動が思いつかない。

混乱は収まっていけない。いきなり三年前に放り出されて、混乱しない方がどうかしている。

全く持って不可解だ。物理的に考えて、起こりうる事象ではない。実は、両親が騙していることを考えたが、さすがに無理がある。やはり、タイムスリップしてしまっただと考えるほうが、筋が通っているように思う。無茶区茶だけだ。

どうして、僕は三年前にタイムスリップしたのか。そんな事象に遭遇した覚えはない。僕は、希美に別離を告げられ、挫け折れ……、

「くそっ」  
思い出してしまった。希美が、もう自分の恋人ではないことを。

別れた場面で、脳裏に蘇る。希美の声が、希美の瞳が、希美の髪が。あの喫茶店での短いやりとりが、すべて夢じゃなかったのかと思えてくる。

猛烈な吐き気。久しぶりに食べた朝食が仇になったか、喉元まで酸味がこみ上げてきた。溢れ出るギリギリで、嘔下する。

「くそっ！」

もう一度、悪態をつく。とにかく、状況を打破しなければ

いけない気がする。この部屋に閉じこもっていても、また記憶が蘇って、辛くなるだけだ。行動すれば、少なくとも意識は沈みこまずに済む。

僕は、かけてあった制服に、袖を通した。

久しぶりの高校通学だが、意外に道順は覚えているものだった。九月といえばまだ暑い盛りだが、今日はそんなに気温が高くない。自転車で切る風の感覚が、気持ちいい。

僕は、自宅から自転車で二十分ほどの公立高校に通っていた。電車通学だと、車内で同級生に会う可能性があるが、自転車だと取り敢えずは学校までは一人の時間を保てる。正直、あまり知り合いに会いたくなかった。教室に入れば、嫌でも顔は合わせるだろうが、何をどう喋ればいいのか分からない。

僕は、ある意味では昨日までの僕とは違うのだから、同級生たちからしたら、違和感を覚えるのではないか……。さすがに五年前、どんな感じで友人と接していたか、うろ覚えでしかない。

自転車を駐輪場において、二年三組の教室へ。教室に入ってから自然を装って教壇のそばを通る。自分の机の場所が分からなかったからだ。教壇には、先生が見るための座席図が置いてあったことを思い出し、横目で自分の席を確認する。こ

の時は一番窓際の、前から六席目。そんな座席に座っていたことがあったつけ。さすがに覚えていない。

「おはよう、桜井くん」

席に着くと、隣の平井和佳子さんが声をかけてきた。ちゃんと彼女の名前を覚えていた自分に少しだけ感動し、「おはよう」と挨拶を返す。

「数学の宿題やつてきた？ 難しかったよね」

「あ、ああ」

いつも、日常会話にどういう風に返していたつけ。記憶を探るが、さっぱり思い出せない。もちろん、宿題のことなんて、もつとさっぱりだ。ここで言っている数学が、数学Bのことなのか数学IIのことなのか。流し目で、黒板の横に張っている時間割を確認。四時限目に数学Bがあるから、たぶんそちらの宿題のことを言っているのだろう。

「でも、桜井くんは、理数得意だから、そんなに苦労はしないか」

「ま、まあね。数Bくらいなら……」

「わたし、数学苦手だからなあ」

どうやら、無難な受け答えができたみたいだ。普段なら普通に会話できるはずなのに、三年前の状況で会話するのは神経を使う。

チャイムが鳴った。朝のホームルームをはじめのため、担任の女性の先生が入ってくる。ああ、二年の時の担任は、溝口先生だったなあと今更ながら思う。そこまで若くはないが、面倒見がよく、生徒からの人気が高かった。今も変わらないのかな……と考えて、苦笑する。「今」という言葉の定義が、曖昧だからだ。

「えー、突然ですが、今日から転入生が来ます」

溝口先生は、開口一番、そう言った。

転入生、という聞きなれない単語に、教室内が沸き立つ。

高校の時の、転入生は珍しいからだ。

だからこそ、僕は思い出した。いや、『だからこそ』ではない。僕は、このイベントを覚えていなければいけなかったし、覚えていなかった自分を後悔した。

僕は心の中で、全てを理解した。なぜ、僕がこの時代にタイムスリップしたのか。なぜ、僕があこのタイミングで、タイムスリップしなければいけないのか。

忘れていた。高校二年の、九月八日。夏休みが終わって、一週間程度経った、この時期。

彼女は。

「奥田さん、入って」

彼女は――。

「こんにちは、はじめまして」

彼女は、転入してきたのだ。

「奥田希美と言います」

奥田希美は、両親の転勤の都合で。

「父親の仕事の都合で、こちらにお世話になることになりました。よろしくお願ひします」

教室の壇上で起つ希美は、少しだけ緊張して、だけど笑顔は絶やさないと、僕が記憶している通りの希美だった。

「のぞ、み……」

僕たちは、再び出会ったのだ。

僕はおそらく、もう一度、希美と出会うために、この時代にタイムスリップしてきた。もう一度、彼女とやり直すために。

思い出す。彼女に別離を告げられた場面を。それに絶望し、自分の膝を折った場面を。

あんな悲劇を、もう二度と繰り返す訳にはいかない。

今度こそ、挫け折れないために。彼女との人生をやり直すんだ。

机の下で、静かに強く拳を握った。

希美は、転入生の運命というべきか、昼休みにはクラスの

みんなに囲まれることになった。

……ということもなく、席が近い女子生徒に誘われて、一緒に学食にお昼を食べに行つた。

「奥田さん、だっけ。珍しいよな、こんなタイミングで転入なんて」

僕は僕で、仲が良かった男子生徒三人と一緒に弁当を広げていた。高校二年のときは、こいつらと確かに良くなるんでいた。今となつては、あまり接点はなくなつてしまつていられど。そして、「今」という時制が正しいのか、判断は難しい。

「結構かわいくない?」

そう言つたのは、桂<sup>かた</sup>。正直、あまり二枚目とはいえないが、お調子者で、女の子が大好きだ。二枚目ではないので、モテないけど。女子の話はだいたい桂から切り出すことが多いと思ひ出す。

将来的には僕の恋人になる女性のことを褒められるのは悪い気はしないけど、とにかく今となつては複雑な気持ちだつた。この「今」の時制もよく分らないが。

「ん、かわいいと思うけど、妹尾<sup>せのお</sup>さんの方がかわいい」

もぐもぐと卵焼きを食べながら、雨<sup>あめ</sup>中<sup>なか</sup>田<sup>た</sup>が言う。妹尾さんね、と桂は教室の隅を見やる。そこには、ケータイを弄りな